



享乐的競技弓術「便射」から読み解く軍事と遊戯文化の狭間

筑波大学 体育系
助教 李 燦雨

1. はじめに

火薬兵器にその役目を取って代わられるまで、弓矢は最も長く使われた人類共通の狩猟道具であり武器であった。特に、韓国では武官選抜試験や軍隊の訓練項目の殆どが弓術で成り立っていたほど、弓術は最も効率的な武術として脚光を浴び、社会と密接に関わりながら単なる一つの武術を超え、国民の遊戯にまで発展した独特な伝統文化である。

本研究は、軍事的に高い実用性に基づき近世まで武文化の中核を担いながら栄えた韓国弓術が、近代改革の急変する社会情勢から必然的な衰退を余儀なくされる中、「便射」という弓術競技を通して再び盛況を迎えたことに着目する。競技性と娯楽性が実戦性にとって代わり、飲酒歌舞が競技と交差しながら現在にまで引き継がれている「便射」の実態を把握し、軍事文化が遊戯文化へ推移する近代弓術文化史の一端を明らかにすることが本研究の目的である。

2. 便射の競技方式と種類

射手がチームを組み行った競技が便射である。便射は、通常各 15 人で構成された両チームが、1 人 3 巡、すなわち 15 本ずつの矢を発射し、その合計で勝負を決める競技である。その種類は、格式の高い正式便射である甲種便射から、変則的な乙種便射、格式外の丙種便射まで 3 種 10 類が文献上確認できるものの、現在は京畿・仁川地域の射亭便射と復元

された長安便射の伝承が確認されている。

3. 射亭便射からみる便射の過程と実態

ゲームの仕掛けである便射開催の通報から準備、施行、解散まで、便射は一連の過程において儀式と手順に従い行われる一種の伝統祭りである。また、便射は弓手のみならず、飲酒を準備する婦女子、競技中の歌舞と演奏を担当する妓工（芸者+楽士）、観衆までを取り入れ行われる一大イベントでもある。

1) 便射決定までの行程

(1) 発起：①偏長決め、②相手決め

射亭や村のプライドをかけ行われる便射には莫大な費用が掛かるが、その費用のほとんどは偏長が負担する。そのため、偏長は弓歴のみならず、財力・社会的地位・人格を取り揃えた人物が推戴されることとなった。

(2) 射通（宣單）：農閑期に、便射を提案する宣單を相手側に送ること。宣單には、便射の日時、場所、競技方式、経費負担などについて記されている。

(3) 答通（応單）：射通への回答で、便射に応じ難い場合、三日以内に宣單を送り拒否の旨を伝える。

2) 便射準備過程

(1) 人員の確保：①選手：初衆会・再衆会・三衆会を通して選抜する。最も優れた若手の射手は「従帯」となり、儀式から実際の便射まで実質的な主将の役割を担う。②妓工：競技の興を添える役として、

的中の際などに踊ったり歌ったりする芸者とそれに属する男の楽士である。③的中の有無など試合の記録を担当する「獲貫」、的中を特有の叫び声で唱えながらチームの士気を高める「獲唱」、的中を告げたり外れた矢の方向や中った場所を指したりする「告伝」、的中の際に大きい旗を回しながら士気を高める「挙旗閑良」、矢取りを担当する「揀箭」。

(2) 飲食の準備：役員と射手のみならず、来賓や射員とその家族から観衆・村人まで御馳走する。そのため、便射の評判を左右する主要な要因であった。

(3) 獲誌の作成：便射の競技記録誌

(4) 大射習（大衆会）：便射の前日の予行演習

3) 便射の実施とその儀式

迎接—開射式—座寄（お膳立て）—帖啓—便射始め—従帯の初矢発射—偏長の発射—閑良の発射—再巡発射—三巡発射—閉会式及び成績発表—座寄—見送り—獲誌廻り（成績最優秀者に賞を与え、慣わしとしていじめてなぶりものにする風習）

4. 便射の特徴

1) 軍事的な実用性の名残

(1) 実戦の流れを汲む競技性重視の文化

便射は宣單を送り宣戦布告する形式で相手を決め、射手は初衆会・再衆会・三衆会の選抜戦を通じた成績を基に決める。弓術が最も優れた従帯が実質的な主将を務め、初矢を射、風の方向や距離などを正確に測る。これは、狩猟や戦闘での指揮官の嚆矢の役割に通じるものである。

また、射手のみならず、獲唱、獲誌閑良、挙旗閑良、告伝のスタッフがチーム一丸となって勝利にこだわり、あらゆる駆け引きが見受けられる。さらに、獲貫・獲唱・獲誌など、武科科挙試験の文化を踏襲しているところが多く、告伝は中り・外れのみならず、

中った的の場所や、外れた矢の方向・射距離などの情報を味方に伝達するなど、実戦性に富む。

(2) 前近代的な階級制・団体性・儀礼性

一見遊びになりがちなスポーツ競技にみられる便射には、弓術力のみならず、階級、社会的地位、年齢を重視するなど、前近代的な社会秩序と軍隊の性質が色濃く残っている。それは、呼名や判定の際、職級や地位が名前と一緒に告げられることや、階級別接待、偏長に対する敬意や待遇などから窺える。

また、飲酒歌舞が勧められる享樂的な文化とは裏腹に、厳格な儀礼に従い競い遊ぶ文化も兼ね備えている。そして、現代弓道やスポーツによくみられる個人戦がなく、チームによる団体戦のみが行われる。これらは朝鮮時代に花咲かせた軍事的な弓術文化の名残であると考えられる。

2) 享樂文化としての遊戯弓術

競技弓術の盛行を後押ししたのが、便射における享樂的な文化である。莫大な費用が掛かる便射は、その費用のほとんどを負担する偏長決めから始まる。現代ではその経済的負担から偏長を申し出る人がいない一方で、1970年代までは興を添える高額な技巧が雇われ、むしろ妓工の規模が便射の規模と格を代弁した。

また、便射では射通の時から、競技が始まる直前の座寄、競技中、昼食休憩、競技終了後の夜まで、飲酒歌舞が一貫して勧められる。そして、競技前後のみならず競技中にも金銭が入り出す賜金文化から、功労者をいじめてなぶりものにする風習まで、現代では目にすることのない遊戯・享樂的な文化が色濃く残っている。このように、軍事文化が遊戯文化へ推移しながら競技と交差する享樂的な弓術文化は、現在までも伝わる根強い射亭文化である。